



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道湧別町川西オホーツク遺跡調査概報（2025年）
Author(s)	高瀬，克範
Citation	北海道大学考古学研究室研究紀要， 5， 133-151
Issue Date	2026-01-08
DOI	https://doi.org/10.14943/2115.98753
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/98753
Type	departmental bulletin paper
File Information	13 Takase.pdf



北海道湧別町川西オホーツク遺跡調査概報(2025年)

Preliminary report on the 2025 archaeological excavation at the Kawanishi-Okhotsk site, Yubetsu, Hokkaido

高瀬 克範^a

^a 北海道大学大学院文学研究院 takase@let.hokudai.ac.jp

Abstract The Kawanishi-Okhotsk site, located in the Yubetsu River basin of eastern Hokkaido, is situated on a lower river terrace along the left bank of the Sensai River. First investigated in 1960 by the local archaeologist Kioe Yonemura, the site yielded notable tusk figurines of a marine mammal and a bear, as well as potsherds and stone tools. These discoveries identified the site as a settlement associated with both the Okhotsk and Satsumon cultures. However, because the original site report provided only limited descriptions, the characteristics of settlements during these periods remained unclear. To address this, the Hokkaido Museum of Northern Peoples conducted excavations between 1991 to 1993, focusing primarily on pit dwellings of the Okhotsk culture. These investigations clarified the number and spatial distribution of pit dwellings and assigned the settlement to the late phase of the Okhotsk culture. Although a possible Satsumon dwelling was also excavated, its details were not fully documented in the site report. Consequently, while these studies significantly improved our understanding of the site as an Okhotsk settlement, the nature of the Satsumon occupation has been poorly understood. Our research project, initiated in 2024, prioritizes investigation of the Satsumon settlement at the Kawanishi-Okhotsk site. In 2025, we established trenches in Pit Dwelling No. 28 and excavated part of the feature. Although the structure of the dwelling walls could not be conclusively identified, the results indicate that the floor was most likely constructed directly on the loam layer corresponding to Natural Stratum V. A full-scale excavation of this feature is planned for the next field season in order to clarify its architectural characteristics and function.

Key words: Kawanishi-Okhotsk site, Okhotsk culture, Satsumon culture
キーワード：川西オホーツク遺跡，オホーツク文化，擦文文化

1. 背景と目的

北海道大学考古学研究室では、2024 年から湧別町川西オホーツク遺跡の発掘を実施してきている(高瀬編 2025)。本稿は、その 2025 年調査の概要報告である。

湧別町川西オホーツク遺跡は、湧別町川西に位置する(図 1, 2)。現在の海岸線からは直線距離にして約 1.2km で、湧別川の河口部付近で合流するセンサイ川左岸の河岸段丘上に立地している。

この遺跡は、米村喜男衛によって 1960 年にはじめて発掘調査が行われた(米村 1981 [1961], 網走市郷土博物館編 1990)。当時の「川西遺跡」には現在のシブノツナイ竪穴住居群から川西オホー

ツク遺跡にかけての複数の包蔵地が含まれるものと考えられる。川西オホーツク遺跡は当時、「川西遺跡」のなかの「伊藤地点」と呼ばれていた。

米村は 3 日間の調査で、オホーツク文化の竪穴建物である「第 1, 2 号竪穴」、擦文文化の竪穴建物である「第 3 号竪穴」を発掘した。第 1 号(9.1m x 7.3m)と第 2 号(規模不明)のふたつの住居跡は焼失住居である可能性が考えられており、2 号竪穴の床面付近からは著名な「熊の丸彫りとシャチ鯨の胴部より上方の丸彫り」が発見されている(網走市郷土資料館 1990)。概報により、本遺跡はオホーツク文化(貼付文期)や擦文文化の集落であることは推定できるが、いずれの時期についても測量図や

詳細な記述がなく、遺跡の内容には不明な部分が多く残されていた(米村 1981, 網走市郷土博物館編 1990)。

このため、北海道立北方民族博物館が 1991 年から 1993 年にかけて遺跡全体の測量図を作成するとともに、地表面で確認できる竪穴建物跡に新たに遺構名を付したうえで第 1～4, 6～10 号竪穴の発掘調査を実施した(青柳 1992, 1994a, 1994b, 1995)。このうち第 2, 3, 4, 8 号竪穴は完掘され、1, 6, 7, 9, 10 号竪穴は一部が発掘された。その結果、オホーツク文化期の集落は貼付文期に位置づけられることが改めて確認されるとともに、多くの骨角器、動植物遺存体が回収され、オホーツク集落の年代、性格、生業などについての理解が深まった(小林 1995, 西本 1995, 吉崎 1995, 種石 2015, 2018)。

しかし、米村が調査した擦文文化の住居は依然として特定されておらず、この遺跡における擦文文化期の集落の理解は今日までほとんど進展がないのが実情である。1992 年の発掘においてオホーツク文化期との予測のもとで発掘された 4 号竪穴は、調査の結果、方形の平面形を呈することが判明した。この遺構は擦文文化に位置づけられる可能性がきわめて高いと考えられるものの、報告では「遺物、柱穴、カマドなどは確認することはできなかった。擦文文化期の竪穴と思われるが、確証は得られ

なかった。」(青柳編 1995:31)と記述されている。本遺跡においては調査記録がのこる唯一の擦文文化の竪穴建物跡の可能性があるものの、その年代を裏付ける明確な証拠はまだえられていないのである。ただし、その後の記録類の再検討によって、この遺構からはカマドの袖や焼土の可能性のある痕跡が確認できる写真が残っていることも指摘されている(種石 2020)。やはり擦文文化の住居が存在する可能性は確実視してよいが、年代や遺構に伴う遺物については新しい情報がほとんど増えておらず、詳細は不明のままである。

一方で、川西オホーツク遺跡に近接するシブノツナイ竪穴住居群の調査がここ 10 年ほどで大きく進展しており、530 基におよぶ竪穴建物跡がすべて擦文文化期の所産と推定されてきており、やはり近接する川西 2 遺跡の竪穴群もその時期に属する可能性が高いことが明らかになってきている(北海道立埋蔵文化財センター 2015, 2016, 2017, 2018, 2019, 2020, 2021, 湧別町教育委員会 2019, 2020, 2021, 2022, 2023)。これらの集落跡は川西オホーツク遺跡と有機的な関係があったと考えるのが自然であり、今後、3 つの集落遺跡をあわせた竪穴群全体の評価が北海道島東部の擦文文化の理解にあたって重要な意味を持つてくると予測される。しかしながら、川西オホーツク遺跡における擦文集落の情報の欠落が、この遺跡群の総

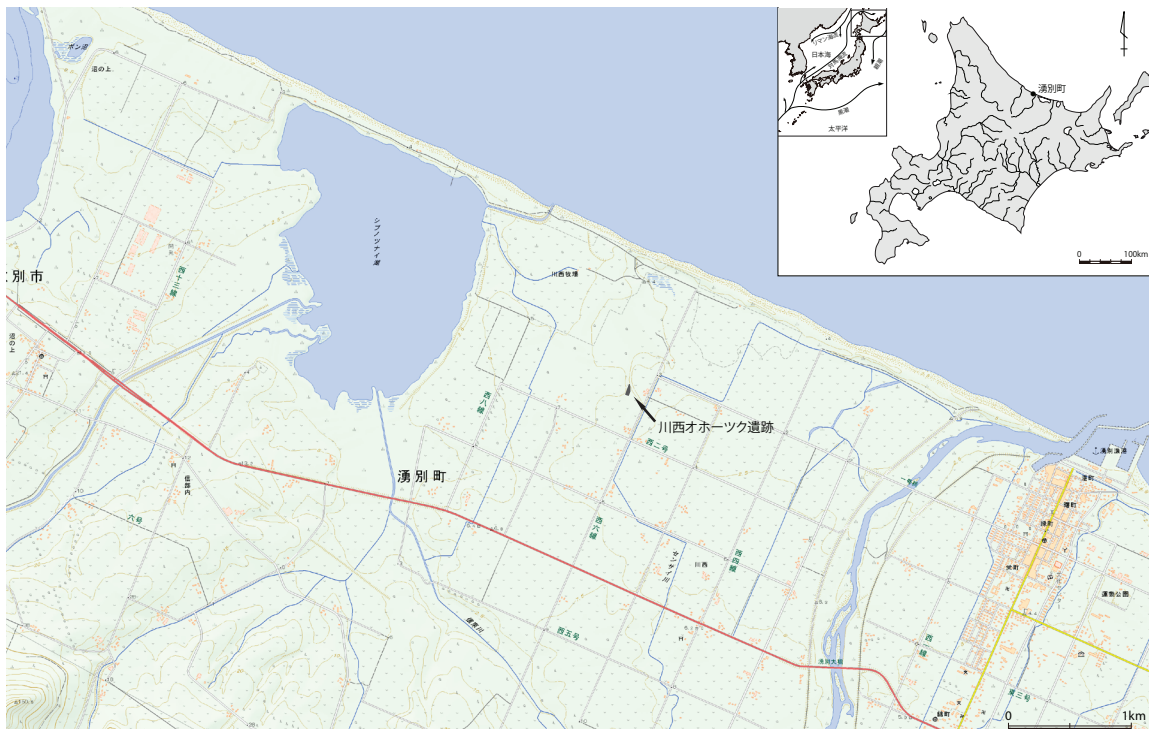


図 1 川西オホーツク遺跡の位置(1)(国土地理院電子地形図25000をもとに作成)

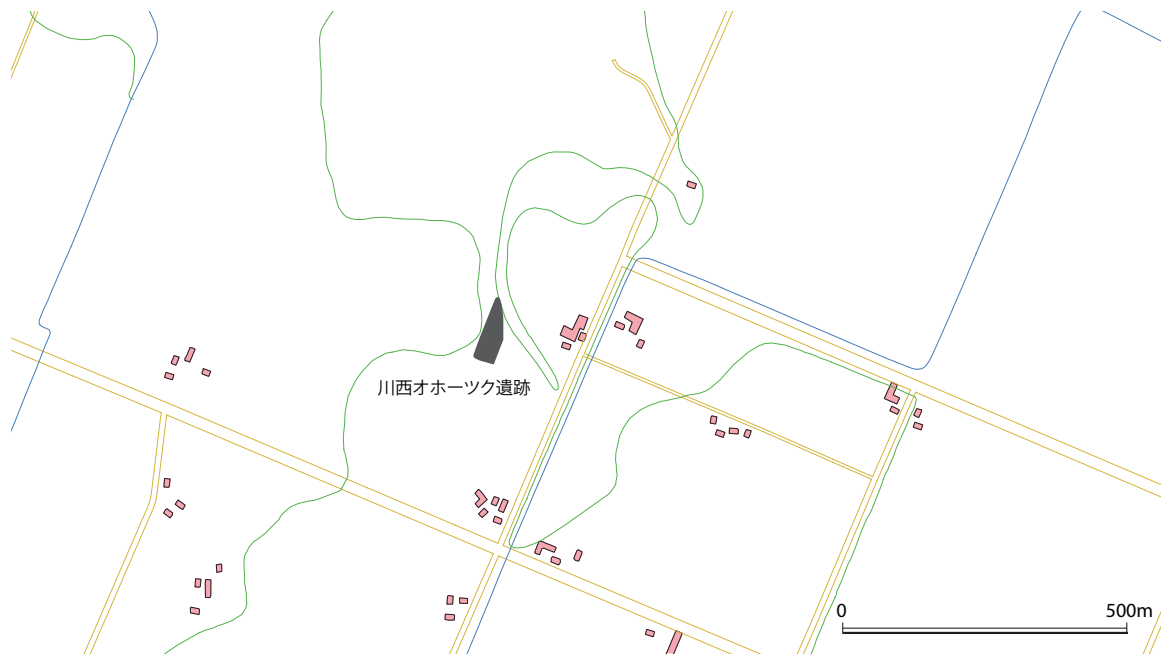


図2 川西オホーツク遺跡の位置(2) (国土地理院基盤地図をもとに作成)

合的な理解の障壁となっている。

こうした研究状況を踏まえ、北海道大学考古学研究室は川西オホーツク遺跡における擦文集落の内容を解明することを目的として、2024年から数年間をかけて発掘調査を行うこととした。主たる対象は、遺構の保存状態が良好と考えられる第28号竪穴である(図5)。より具体的な調査の目的は、下記のとおりである。

- 1) 土器の型式論的検討、放射性炭素年代測定から、川西オホーツク遺跡における擦文集団の居住年代を明らかにする。
- 2) 出土動物遺体から狩猟漁労活動の内容を解明するとともに、その同位体分析により当時の海洋生産性を明らかにする。
- 3) 出土炭化種子から当時の植物利用や雑穀農耕の有無、およびその入手経路や育成技術を明らかにする。
- 4) 土器付着炭化物の同位体分析や土器胎土の脂質分析から、当時の食生活を復元する。
- 5) 土器付着炭化物内の微化石や残留デンプンから、当時の植物利用を解明する。
- 6) 土器の圧痕レプリカ法により、当時の植物利用を解明する。
- 7) 将来的な環境DNA分析や胆汁酸分析などの理化学的な分析のために、遺構内外から土壌サンプルを採取する。
- 8) 2)～7)を通して擦文文化が北海道東部に拡散した要因を考察するための情報をえる。

- 9) 人工遺物(とくに土器、土製品)からみた他地域との関係を明らかにする。

- 10) 遺構(とくに竪穴建物跡)の建築技術からみた他地域との関係を明らかにする。

- 11) 火災住居の場合、建築材からみた建築方法や木材利用の特徴を解明する。

- 12) 礫石器の表面とそれらが埋没していた土の中の微化石や残留デンプンの検出・比較検討を通じて、当時の植物利用を明らかにする。

- 13) 本遺跡のオホーツク文化の石器利用について、既存の発掘資料もあわせて使用痕分析によって明らかにする。

本概報に関わる発掘調査報告としての例言および凡例は、以下の通りである。

[例言]

- 1) 本稿は、北海道紋別郡湧別町川西516番地に所在する川西オホーツク遺跡の発掘調査概報である。

- 2) 本遺跡の北海道埋蔵文化財包蔵地台帳の登録番号と、本調査において採用した遺跡略号は、次のとおりである。

登録番号 I-21-032

調査略号 KOK

- 3) 本遺跡の発掘調査は、北海道大学大学院文学研究科考古学研究室が行った。

- 4) 野外調査の期間、調査面積、調査主体などは次のとおりである。

【野外調査期間・調査面積】2025年8月12日



図3 周辺の遺跡(北海道教育委員会「北の遺跡案内」より,
<https://kitano-iseki.maps.arcgis.com/apps/webappviewer/index.html?id=748430b778a04092afe4c92656474bec>)

～8月19日, 約120 m²

【調査主体】北海道大学大学院文学研究院 研究
 院長 川端康弘

【発掘担当者】北海道大学大学院文学研究院 教
 授 高瀬克範

5) 出土遺物の整理は調査参加者で分担して実施
 し, 本稿の執筆は高瀬克範が行った。

6) 発掘調査の参加者は下記の通りである。
 高瀬克範, 國木田大(以上, 北海道大学教員),
 松本航太, 小倉龍想(以上, 北海道大学大学院生),
 高橋尚太, 田中明璃(以上, 北海道大学学部生),
 Keelin Murphy (University College of Dublin 大学
 院生), 柴野初音(北海道博物館)。

7) 発掘調査および本概報の作成にあたり, 下記の
 方々と機関にお世話になった。記して感謝申し上
 げる(五十音順, 敬称略)。

阿部 勉, 伊藤 斉, 太田 圭, 菊地芳朗, 熊本
 俊朗, 坂本雄仁, 田口 尚, V・デリュエギン,
 中島一之, 林 勇介, 北海道教育委員会, 三谷智
 広, 湧別町教育委員会。

8) 出土遺物および野外調査時に作成した図面類
 は, 最終報告書刊行まで北海道大学大学院文学研
 究院考古学研究室で保管し, その後, 湧別町教育
 委員会に返却する予定である。

9) 本書は, 科学研究費補助金・基盤 A(23H00010),
 基盤 B(23K20512), 基盤 B(23K25386) の研
 究成果の一部である。

【凡例】

1) 層名の記載, 土層注記の方法は第1章第3節
 3項のとおりである。

2) 測量図における高さは, 標高を使用した。

3) 測量図における北は真北である。現地で設定し
 たグリッドの南北ラインの設定には磁北を利用し
 た。

4) ハンドヘルド GPS による基準点(P1, P2)の
 座標(緯度, 経度, 世界測地系)は下記の通りで
 ある(図5)。より精確な座標は最終報告書に盛
 り込む予定である。

P1 N44° 14' 09.19" E143° 34' 33.50"

P2 N44° 14' 09.34" E143° 34' 33.25"

4) 遺物の掲載基準

本書に図を掲載した遺物の選択基準は下記のと
 おりである。

【土器】表土以外から出土した口縁部破片。ただ
 し, 胴部・底部破片や表土から出土したものであ
 っても遺跡の理解にとって重要と判断したものは適
 宜追加した。

【剥片石器】表土以外から出土したツール。そ
 の他, 表土から出土したものであっても, 遺跡の
 理解などにとって重要と判断したものは適宜追加
 した。

【礫石器】表土以外から出土した資料のうち, 使
 用痕の有無にかかわらず, 最大長もしくは最大幅

表1 周辺の遺跡

包蔵地名	登録番号	住所	種別	時期・文化	立地	標高	出土遺物
川西オホーツク遺跡	I-21-032	湧別町川西 516	集落跡	オホーツク	湧別川の支流古川の開析で残置した小独立丘上	5m	土器, 石器, 骨器
川西遺跡	I-21-034	湧別町川西 604	集落跡	不明			土器, 石器
川西 2 遺跡	I-21-056	湧別町川西 501-1, 508, 509	集落跡	オホーツク, 擦文	湧別川支流古川左岸の河岸段丘上	7-9m	
シブノツナイ 竪穴住居群	I-21-035	湧別町川西 499-1・2, 502-1・2, 503, 506-1・2, 714, 717 ~ 720, 722-1 ~ 3, 930, 1056, 1059-1	集落跡	縄文, 続縄文, オホーツク, 擦文	オホーツク海とシブノツナイ湖を望む海岸段丘上	5m	土器, 紡錘車, 石器
シブノツナイ 遺跡	I-21-033	湧別町信部内 37	集落跡	縄文 (前期), 縄文 (中期), 擦文	シブノツナイ川右岸の段丘上	5 m 前後	土器, 削器, 剥片, 石斧
シブノツナイ 2 遺跡	I-21-055	湧別町信部内 587, 6138-5	遺物包含地	縄文 (早期), 縄文 (前期), 縄文 (中期)	シブノツナイ川右岸の段丘上	7 ~ 9m ほど	土器, 石鏃, スクレイパー, 剥片, 石斧
シブノツナイ 湖底西遺跡	I-03-067	紋別市沼の上 110 番地 (湖底)	湖底遺跡				縄文 (早期), 縄文 (中期)
沼の上 1 遺跡	I-03-045	紋別市沼の上 70, 71, 75, 77	遺物包含地	縄文	シブノツナイ湖西岸の微高地	4 m	石槍, 剥片
沼の上 2 遺跡	I-03-046	紋別市沼の上 482-1・2, 483-1 ~ 4, 485, 491-1・2	遺物包含地	縄文 (中期)	シブノツナイ川左岸段丘	10 m	土器

が 5 cm 以上の比較的大きな資料。

2. 周辺の遺跡

湧別町内では、旧石器時代から考古学的アイヌ文化期にわたる埋蔵文化財包蔵地が 57 箇所確認されている。図 3 には、隣接する紋別市域の一部の包蔵地も含めて、現時点で確認されている川西オホーツク遺跡周辺の包蔵地を図示した。また、表 1 には、図 3 に含まれている包蔵地のうち湧別川よりも西側に位置する湧別町内の包蔵地、およびシブノツナイ湖に近接する紋別市域の包蔵地にかかわる台帳上の基本情報を提示した。

シブノツナイ湖周辺の段丘上には、縄文早期～中期の包蔵地（シブノツナイ、シブノツナイ 2、沼の上 1 遺跡）があるほか、シブノツナイ湖の湖底にシブノツナイ湖底西遺跡（縄文早期・中期）が存在するなど、縄文文化前半期の包蔵地が複数分布している。

センサイ川などの小河川がかつて蛇行していたシブノツナイ湖と湧別川左岸のあいだには（図 4）、低位の河岸段丘上にオホーツク文化や擦文文

化の包蔵地が確認されてきている。竪穴建物跡が地表面から凹みとして認識できる包蔵地が近接しているのが特徴であり、シブノツナイ竪穴住居群で計 530 基、川西 2 遺跡で計 102 基の竪穴建物跡の存在が想定されている（北海道埋蔵文化財センター 2015, 2016, 2017, 2018, 2019, 2020, 2021, 湧別町教育委員会 2019, 2020, 2021, 2022, 2023）。これらの多くは擦文文化期の所産であることが、北海道埋蔵文化財センターや湧別町教育委員会による上記の調査で明らかになってきている。

これに対して、地表面で 50 基の竪穴建物跡が確認される川西オホーツク遺跡では、擦文文化に加えてオホーツク文化の竪穴建物が含まれることがすでに明らかになっている。しかし、近隣の遺跡とは対照的に、擦文文化の遺構・遺物については従来の調査でえられてきた情報はきわめて少ない（網走市郷土資料館 1990, 青柳編 1995）。

米村喜男衛による 1960 年の調査を川西オホーツク遺跡の第 1 次調査（米村 1981, 網走市郷土博物館編 1990）、北海道立北方民族博物館による

中湧別

国土地理院技術資料 D1-No.913

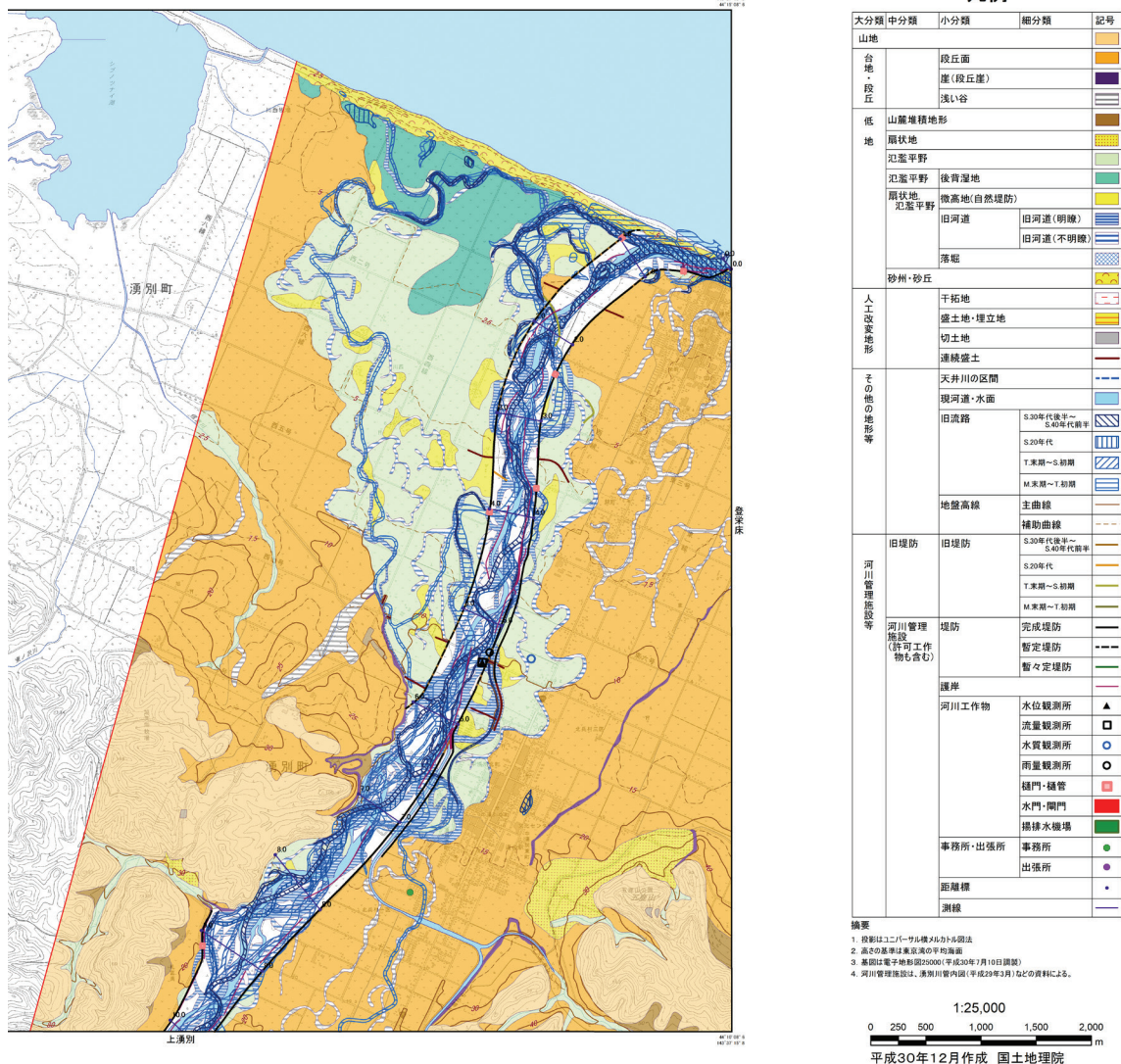


図4 遺跡周辺の地形(国土地理院治水地形分類図「中湧別」)

1991～93年の調査を第2次調査とすると(青柳編1995),2024年からの北海道大学考古学研究室による調査は第3次調査とよぶことができる。第3次調査においては、すでに多くの情報が収集されてきているオホーツク文化期ではなく、擦文文化期の川西オホーツク集落に着目する。

3. 発掘調査の方法

(1) 調査区の設定

2024年に、第28号竪穴を取り囲むように設定した4mグリッドを利用した。グリッドのY軸は磁北(真北より9.74°西偏)である。X軸は西から、Y軸は南から、それぞれ01, 02, 03・・・と命名し、グリッドの位置はX-Yの位置を組み合わせる01-01区, 01-02区,

01-03区・・・などと表記する。

図5では、北海道立北方民族博物館が第2次調査時に作成した遺跡全体の測量図に、2024年の測量結果をあわせて表示している。第2次調査時の測量杭は残存していないと考えられることから、厳密な意味での図の合成は不可能である。したがって、図5はあくまでもおおまかな位置関係を表示しているにすぎない。なお、図5では第2次調査時に遺構名が付されていなかった地表面の凹みに、すべて番号を付してある。第2次調査では第1～10号までの遺構名が利用されていたため、ここでは第11号以降の番号を未命名の竪穴建物に割り当てた。その結果、本遺跡では第50号竪穴までが確認された。

2024 年度の野外調査前、包蔵地はクマザサが密集して繁茂し、地面には多くの倒木や落木がみられた。2025 年の調査前は下草の繁茂は 2024 年よりは少なかったが、草払機による草の除去と、人力での落木の除去を実施したうえで発掘調査を開始した。

(2) 遺構の発掘と遺物の取り上げ

第 28 号竪穴は、四分法によって調査を行った。周堤と思われる高まりの外側にセクションポイントを 4 箇所設置し (A ~ D)、30cm 幅のベルトを設定した。図 5 の 2025 年調査範囲内のなかでベルト以外の箇所では表土を概ね除去したのち、ベルトに沿って設定した 20cm 幅のサブトレンチ内を掘削した (図 6)。サブトレンチの位置を示す便宜的な名称として、02-03 区北東側を中心とする区画を「N 区」、02-02 区を中心とする区画を「S 区」、02-03 区西側を中心とする区画を「W 区」、02-03 区から 03-03 区を中心とする区画を「E 区」と呼称した。

表土以外から出土した出土遺物は、すべてトータルステーションで位置を記録し、断面は写真撮影ののち手書きの実測図 (20 分の 1) を作成した。写真撮影には 1800 万画素以上のデジタル一眼レフカメラをもちいた。サブトレンチ内の土壌の一部は、炭化種子の有無を確認するためのフローテーション用のサンプルとして採取した。

(3) 土層の注記方法

- 色 『新版標準土色帳』(小山・竹原 1967) にしたがった。
- 土性 肉眼での観察および自らの接触・掘削にもとづき、構成物質の土砂の粒径を粗砂 (2.0 ~ 0.2mm)、細砂 (0.2 ~ 0.02mm)、シルト (0.02 ~ 0.002mm)、粘土 (0.002mm 以下) を目安として区分した。シルトに細砂が混ざる場合は、「砂質シルト」とした。
- 粘性 強、やや強、中、やや弱、弱の 5 段階に区分した。
- しまり 強、やや強、中、やや弱、弱の 5 段階に区分した。
- 混入物など 土性がことなるブロック、炭化物・焼土粒・動物骨・礫などの混入物を記載した。混入物の大きさは、最大粒径をしめす。混入量は、「ごく微量」が 2% 以下、「微量」が 5% 以下、「少量」が 10% 以下、「や

や多量」が 25% 以下、「多量」が 50% 以下である。混入土の視覚的な目安は土色帳を参考にした。また、混入物の起源が明確な場合には、その層名も記載した。

(4) 層名の記載

- 基本層序 自然堆積層および耕作土は、ローマ数字で新しい方から I, II, III…と命名した。
- 遺構 遺構埋土は、アラビア数字で新しい方から 1, 2, 3…と命名した。試掘坑内で確認した層についても、現地では遺構に準じて命名した (そのうち基本層序としたものは、上記 a の方法により読み替える)。
- 層位の細分の必要が生じた場合は、自然堆積層・遺構埋土を問わず小文字のアルファベットを付記して Ia・Ib, 3a・3b…のように記載した。
- 2025 年調査のサブトレンチ内で分層したサブ暫定的な層位は、大文字のアルファベット (A, B, C…) を付した。次年遺構の調査結果を踏まえて名称を変更する。

4. 基本層序

第 28 号竪穴に近接する TP1 (2024 年調査済) の調査結果を基本層序として用いる。下記のとおりである。

- I 層 (TP1 の 1 層) : 10YR2/3 黒褐色 砂質シルト 粘性弱 しまりやや弱。現生の植物の根や枯葉を多量に含む。焼けた礫が出土。表土層。
- II 層 (TP2 の 2 層) : 10YR1.7/1 黒色 砂質シルト 粘性やや弱 しまり中。現生の植物の根を少量含む。遺物包含層。
- III 層 (TP の 3 層) : 7.5YR2/2 黒褐色 砂質シルト 粘性中 しまりやや強。現生の植物の根を微量に含む。
- IV 層 (TP2 の 4 層) : 10YR4/2 灰黄褐色 砂質シルト 粘性やや強 しまりやや強。上位は土壌化により黒褐色 (10YR2.2) を呈する。漸移層。
- V 層 (TP1 の 5 層) : 10YR7/2 にぶい黄橙色 砂質シルト 粘性強 しまり強 地山の「ローム層」。

5. 調査結果

(1) 第 28 号竪穴建物

地表面では、約 6.0 x 5.9m の正方形に近い

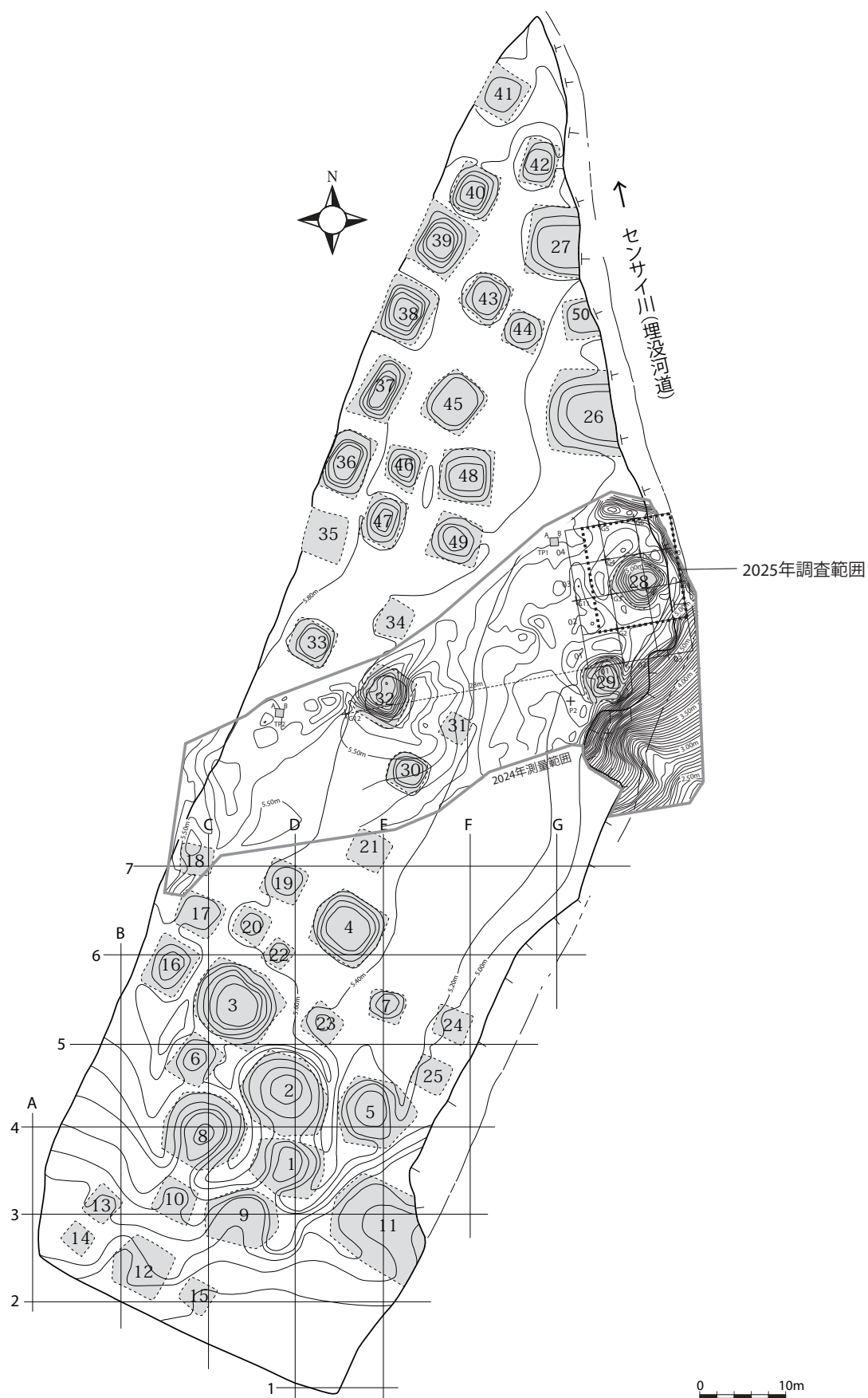


図5 2025年度の調査位置(青柳編1995の測量図と2024年の測量結果を統合して作成)

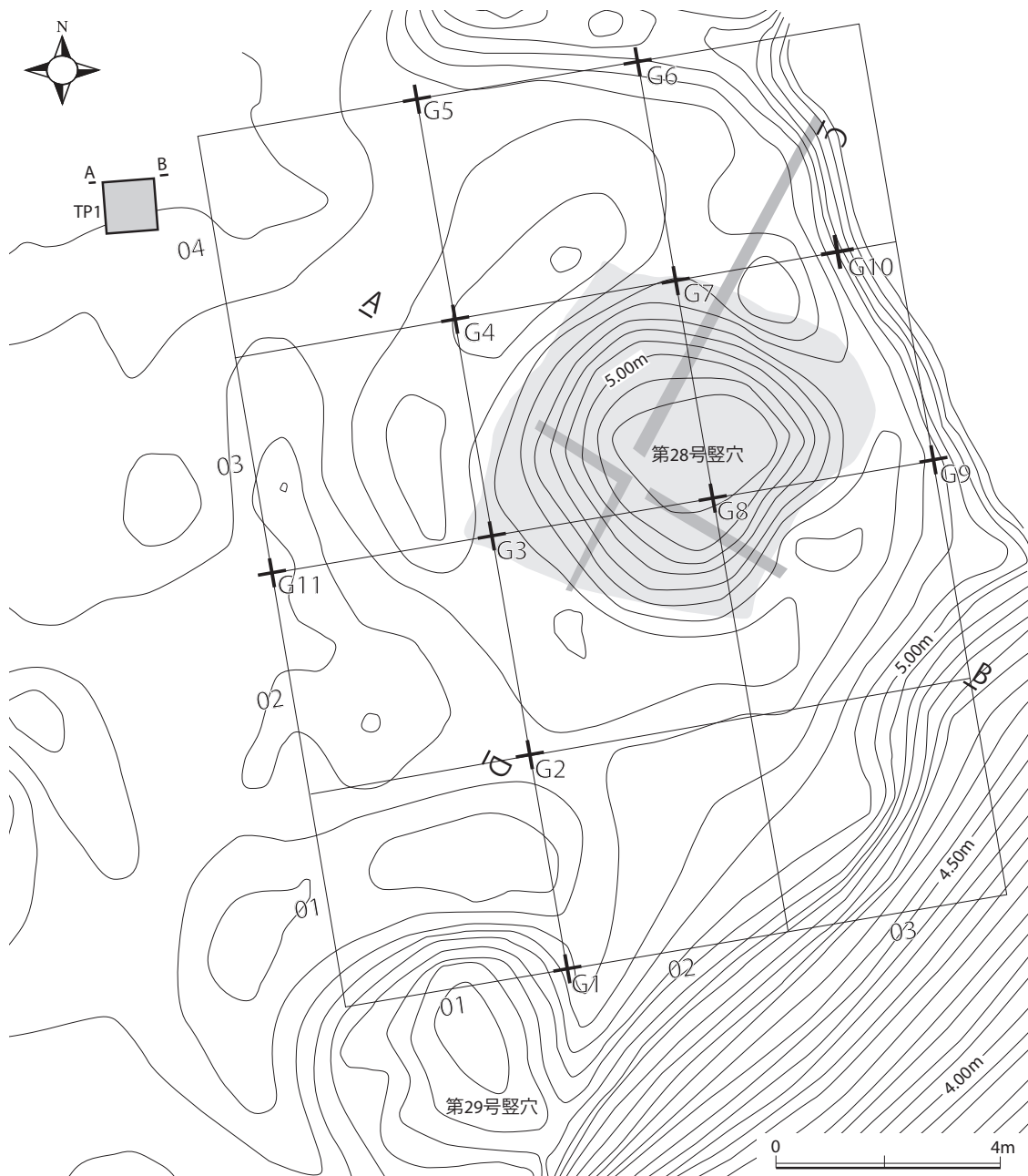


図6 第28号竖穴と周辺の平面図

凹みとして認識できる（図6）。北西・南東のベルト（セクションポイントA-B）、北東・南西のベルト（セクションポイントC-D）に沿って約20cm幅のサブトレンチを設定し、その内部を掘削した。図6では、おおよその凹みの範囲を薄いトーンで、サブトレンチの位置を濃いトーンで表示している。調査時間の制約からサブトレンチ内部のすべてを掘り切ることができなかったが、掘削できた部分の断面図を図6に示した。各層の特徴は次のとおりである。

1層：7.5YR3/3 暗褐色 砂質シルト 粘性

弱 しまりやや弱 木本やササ属の根などを多量に含む 表土。

1a層：10YR4/2 灰黄褐色 砂質シルト 粘性弱 しまり弱 ササ属の根などをきわめて多量に含む。

2層：10YR2/1 黒色 砂質シルト 粘性中 しまり中 ササ属の植物の根を多量に含む。

3層：7.5YR3/2 黒褐色 砂質シルト ササ属など植物の根を少量含む。

4層：10YR2/1 黒色 砂質シルト 径1～5cm程度の「ローム」をブロック状にごく微量に含む。

5層：10YR3/2 黒褐色 砂質シルト 粘性強 し

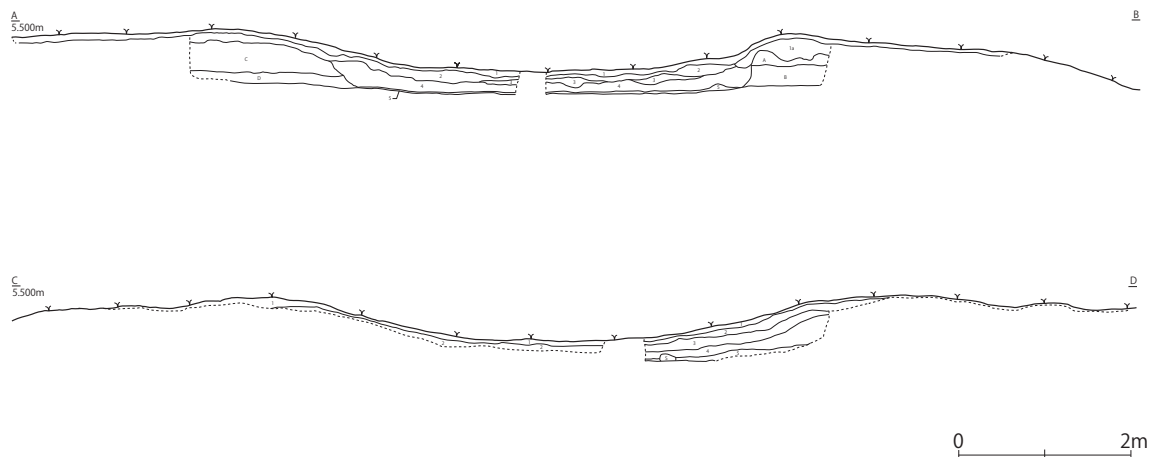


図6 第28号縦穴断面図(2025年調査終了時暫定版)

まりやや強 径1～5cm程度の「ローム」をブロック状に微量に含む 径5mm～2cm程度の炭化物粒を微量に含む。

A層：10YR3/4 暗褐色 砂質シルト 粘性中 しまりやや強 ササ属など植物の根を少量含む 基本層序IV層に性状が類似するが、しまりがより強い。

B層：10YR2/3 黒褐色 砂質シルト 粘性中 しまり弱 ササ属など植物の根を微量に含む 基本層序IV層に性状が類似する。

C層：5YR2/2 黒褐色 砂質シルト 粘性強 しまり強。

D層：7.5YR2/2 黒褐色 砂質シルト 粘性やや強 しまりやや強。

E層：10YR7/3 にぶい黄橙色 細砂 粘性弱 しまりやや強。

2025年は調査時間の制約から十分に堆積状況を吟味することができなかったため、壁や周堤の認識などはまだ暫定的なものにとどまる。基本層序V層の「ローム層」はサブトレンチ内の全面にわたって良好に残存していた。その直上には炭化物や「ローム」ブロックを含む薄い黒褐色層があり(5層)、基本層序V層が床面として利用されていた蓋然性が高い。サブトレンチ内のV層上面およびその直上では柱穴や焼土は確認できなかった。壁の立ち上がりは認定が難しく、壁の外側の自然堆積層として暫定的に理解した層も、28号縦穴の北西で確認したTP1の基本層序とは一定程度性状が異なっている。TP1に近いA-Bセクション北西側では黒褐色の土層が広く分布しており、基本層序IV層が明確には確認できない。これに対して、TP1から距離的にはより遠いA-Bセクション南東側で基本層序IV層に近い堆積物が確認された。

また、周堤と思われる部分の断面でも、旧表土、「ローム」や土壌を含む明確な掘り上げ土、遺構が利用されていた時期に表面に堆積した炭化物等がまったく確認できなかった。これらの現象が何を意味しているのは次年度の調査で遺構内部および周辺を広く掘削することによって確認する必要があるが、第28号縦穴周辺ではちょうどプランに沿うように木が繁茂しており、周堤部分はとくに木の根による影響を強く受けている可能性も考慮に入れておく必要がある。遺構東側のプランはやや外側に張り出すなど、遺構の平面形が歪んでいる箇所もある。これがカマドや煙道に関係している可能性も考えられるが、遺構廃絶後の自然的な要因による変形の可能性もある。周堤がそうした影響を受けている場合は、攪乱の影響がないと思われる他の箇所でも断面を確認する必要も出てくる。

(2) 出土遺物

2025年調査のすべての出土遺物の一覧を、表2に示した。遺物の番号は2024年調査からの通し番号を利用しているため、2025年調査出土遺物は17番からの番号を付している。2025年調査の出土遺物の総数は53点で、内訳は土器片が10点、石器が43点である。石器は全体の84%が礫(15点)と黒曜石製の剥片(21点)によって占められている。図7、8には、先述した基準によって選択した遺物に加えて、表土出土ではあるが本遺跡の理解にとって重要と考えられる遺物を掲載した。

a. 土器

図7.1は、表土出土の擦文土器口縁部破片である。大きく開く口縁部の外面に一条の点列が巡り、頸部文様帯に沈線による斜格子状のモチーフが見られる。器種は甕と考えられ、内面には付着炭化物

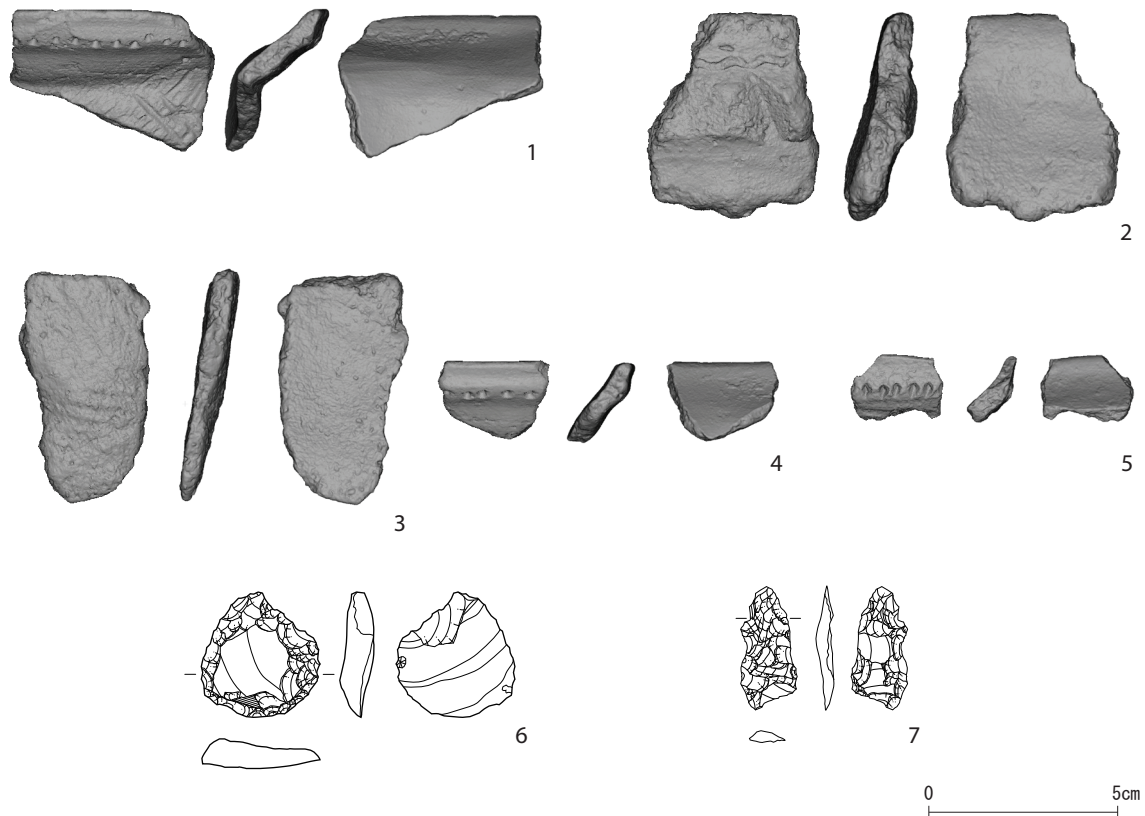


図7 2025年調査出土遺物(1)

が確認される。図 7.2 は、表土出土のオホーツク土器口縁部破片である。肥厚した口縁部に蛇行する一条の貼付文が巡る。内面に炭化物が付着している。図 7.3 は、サブトレンチ 4 層出土の続縄文土器の胴部と考えられる破片である。外面は摩滅しているが、RL の長条縄文の一部が確認される。器壁は薄く、地紋の特徴からみても、続縄文後期の深鉢である可能性が高い。第 2 次調査でも数は少ないが後北 C₂・D 式が出土しており、第 3 次調査の 2024 年調査でも後北 C₂・D 式の可能性がある破片が出土している（高瀬編 2025, 図 8.1）。続縄文後期の遺構は明確には確認されていないが、本遺跡は続縄文後期の人々にもよっても利用されていたことは確実である。図 7.4 は、表土出土の擦文土器口縁部破片である。大きく開く口縁部外面に一系列の点列が巡る。器種は甕と考えられる。図 7.5 は、サブトレンチ 4 層出土の擦文土器の甕の口縁部破片である。図 7.1, 7.4 と同様に、大きく開く口縁部外面に、点列が一系列めぐる。

b. 石器

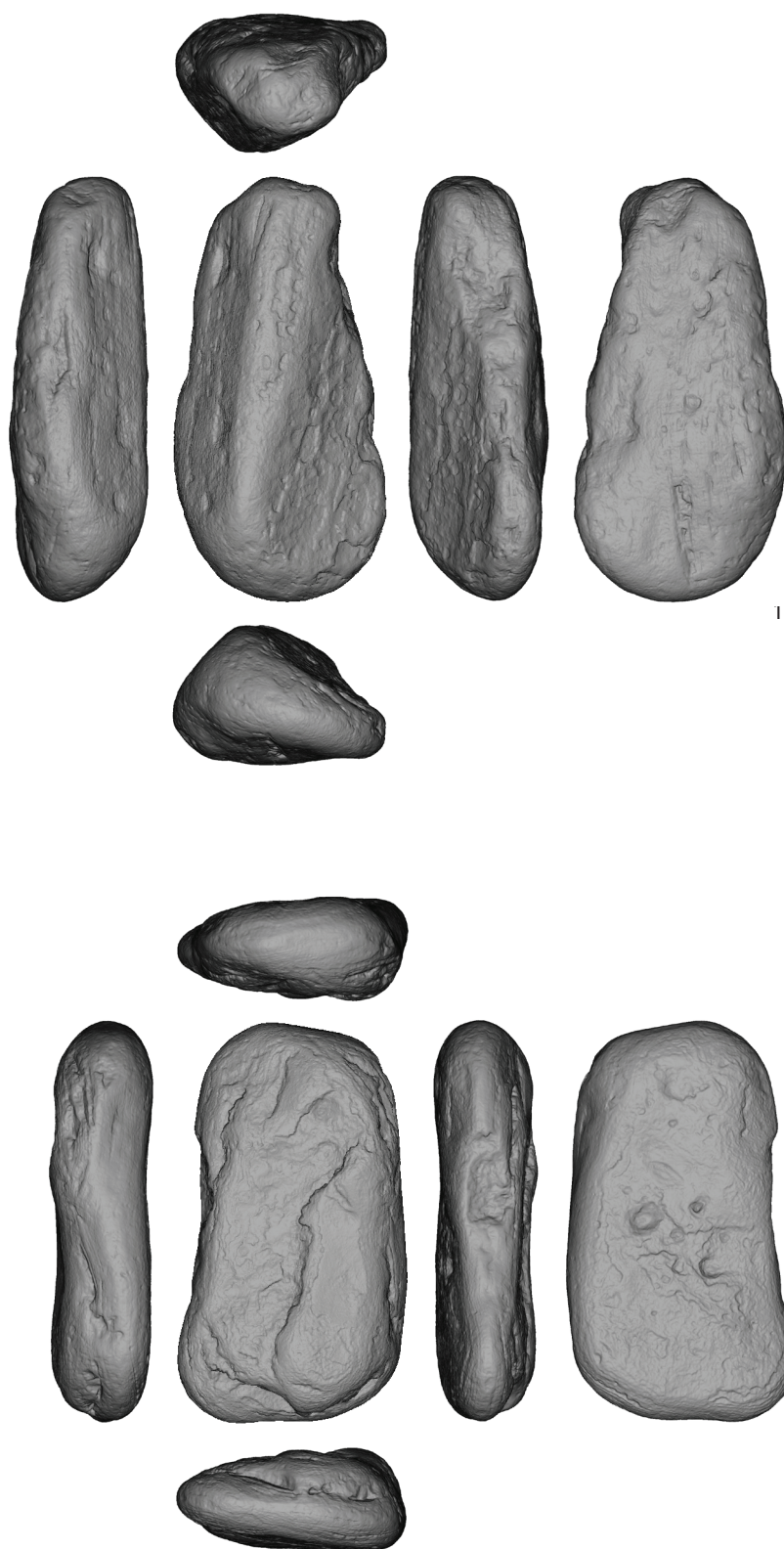
図 7.6 は、表土出土の黒曜石製搔器である。いわゆる円形搔器であり、技術形態学的な特徴から続縄

文後期に属する可能性が高い。同軸落射照明付き金属顕微鏡（オリンパス BX-FM）を用いて高倍率法で分析したところ（Keeley 1977, 1980）、素材剥片背面側に使用痕光沢面は見られなかったが、腹面側では縁辺部の広い範囲に直交方向の線状痕と使用痕光沢面が確認された。図 8 の A 部と C 部には直交方向の線状痕と OB-I タイプ光沢が、B 部にはそれらに加えて部分的に OB-B や OB-E タイプ光沢が分布している（御堂島 1986, 2005）。乾燥皮との接触がもっとも考えやすく、線状痕の方向からみて皮なめしに利用された道具と推定される。

図 7.7 は、サブトレンチ 2 層出土の黒曜石製石鏃である。両面調整で比較的人念に押圧剥離による調整が施されているが、基部や縁辺の形状が整っていないため未製品の可能性もある。図 8.1 および図 8.2 は、サブトレンチ 2 層出土の礫である。表面に明確な使用痕は確認されないが、本遺跡では河原で採集したと思われる同様の礫が表土からも数多く出土している。

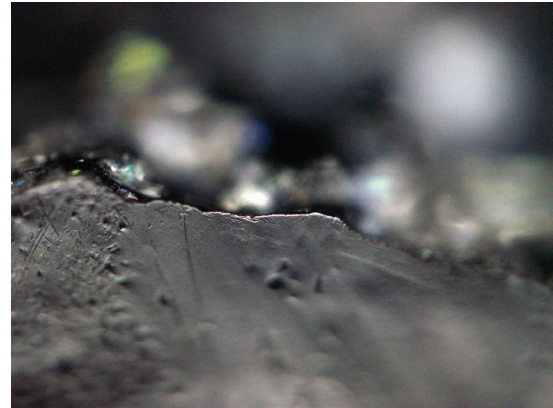
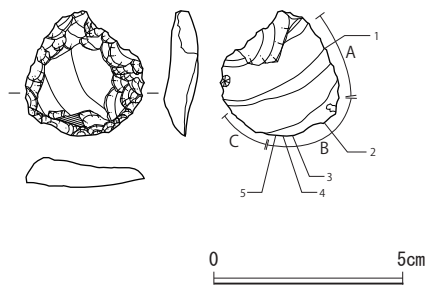
c. フローテーションによる遺物回収

竪穴埋土内における動植物遺体の残存状況を確認するため、サブトレンチの掘削時に表土よりも下

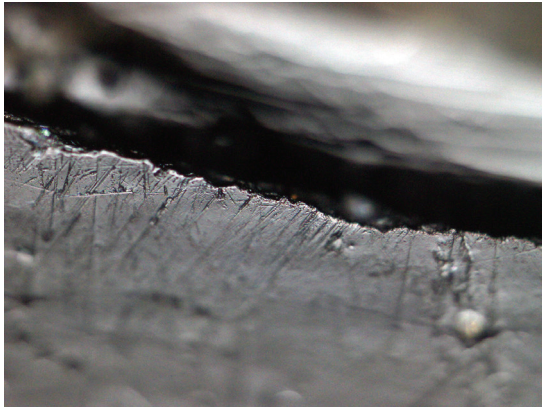


0 5cm

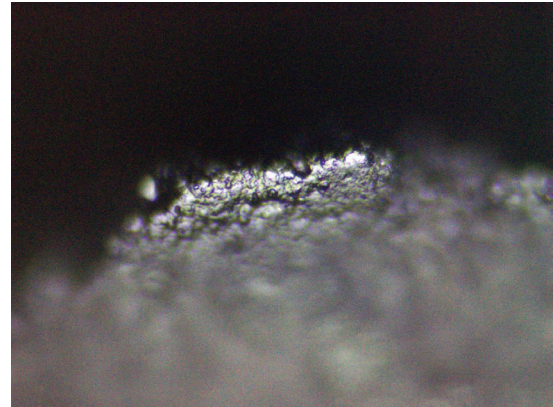
図8 2025年調査出土遺物(2)



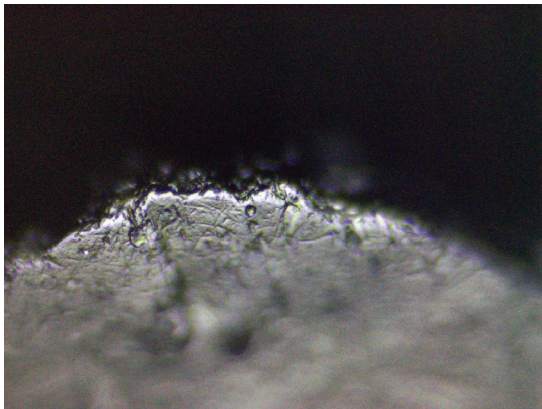
1 (200x)



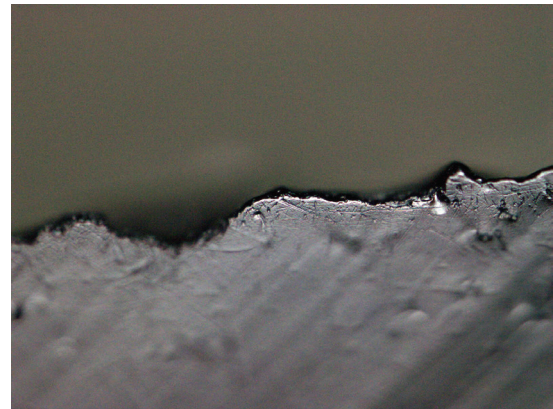
2 (200x)



3 (500x)



4 (500x)



5 (200x)

図8 掻器の使用痕(写真横幅は200xで500 μ m)

位から遺構内堆積物の一部をフローテーション用のサンプルとして採取した。土壌サンプルの袋数から概算して、サンプルの容量は遺構埋土の2層と3層をあわせて約130リットル、4層が約50リットルである。これらの層では掘削時に炭化物や動物の骨の痕跡は全くあるいはほとんど確認されず、自然遺物の包含量はきわめて少ないことが予測された。フローテーションの作業時にも、炭化浮遊物の量はきわめて少なかった。採取した土壌サンプルのうち、本概報作成時までには4層の堆積物計3.85リッ

トル分をウォーター・フローテーションで処理したところ、同定不能の微細な骨片1個および黒曜石製の碎片3個が検出された。しかし、植物遺体は全く検出されなかった。

5. まとめと展望

2025年調査では第28号竪穴建物跡の内部と周堤の調査に着手したが、時間の制約から表土の除去とサブトレンチの掘削で作業が終了した。床面は自然堆積層V層（ローム層）の上面もしくは内部に

構築されている可能性が高いことが判明したが、壁や周堤の詳細を把握することができなかったため、次年遺構の調査で確認する必要がある。

出土遺物は必ずしも多くはないが、土器はオホーツク土器や続縄文土器とともに複数の擦文土器片が出土しており、遺構の帰属文化にかかわる現時点での認識と矛盾はない。石器は河川で採集された円磨度が比較的高い礫や黒曜石製の剥片が8割以上を占めているが、黒曜石製の石鏃や搔器も見られた。剥片石器の多くは擦文文化期のものではなく、オホーツク文化期や続縄文文化期の所産である可能性が高い。少量の土壌サンプルをフローテーションで処理し、動物骨片や黒曜石製碎片は出土したが植物遺体は出土しなかった。次年度の発掘では、第28号竪穴内部の本格的な調査に着手する予定である。

引用文献

青柳文吉 1992「湧別町川西遺跡発掘調査概報」『北海道立北方民族博物館研究紀要』1:77-88。
青柳文吉 1994a「湧別町川西遺跡発掘調査概報(2)」『北海道立北方民族博物館研究紀要』3:83-92。
青柳文吉 1994b「貼付浮文土器を出土するオホーツク文化の集落跡―湧別町川西遺跡について―」『考古学ジャーナル』371:19-21。
青柳文吉編 1995『湧別町川西遺跡―北海道東部におけるオホーツク文化の遺跡調査―』北海道立北方民族博物館。
網走市郷土博物館編 1990『収蔵考古資料目録第4集 オホーツク海沿岸の遺跡』網走市立郷土博物館。
小林幸雄 1995「銚先端部に残された赤色系付着物」青柳文吉編『湧別町川西遺跡―北海道東部におけるオホーツク文化の遺跡調査―』:49-57, 北海道立北方民族博物館。
小山正忠・竹原秀雄 1967『新版 標準土色帖』農林水産省農林水産技術会議事務局。
高瀬克範編 2024『湧別町川西オホーツク遺跡調査概報(2024年)』北海道大学考古学研究室。
種石 悠 2015「北海道湧別町川西遺跡出土オホーツク文化の有孔円盤について」『北海道立北方民族博物館研究紀要』24:67-78。
種石 悠 2018「北海道湧別町川西オホーツク遺跡出土の金属器について」『北海道考古学』54:141-148。
種石 悠 2020「北海道湧別町川西オホーツク遺跡の未報告資料について」『北海道立北方民族博物館研究紀要』29:107-136。

西本豊弘 1995「川西遺跡出土の動物遺体」青柳文吉編『湧別町川西遺跡―北海道東部におけるオホーツク文化の遺跡調査―』:59-68, 北海道立北方民族博物館。

北海道立埋蔵文化財センター 2015『重要遺跡確認調査報告書 第10集』北海道立埋蔵文化財センター。

北海道立埋蔵文化財センター 2016『重要遺跡確認調査報告書 第11集』北海道立埋蔵文化財センター。

北海道立埋蔵文化財センター 2017『重要遺跡確認調査報告書 第12集』北海道立埋蔵文化財センター。

北海道立埋蔵文化財センター 2018『重要遺跡確認調査報告書 第13集』北海道立埋蔵文化財センター。

北海道立埋蔵文化財センター 2019『重要遺跡確認調査報告書 第14集』北海道立埋蔵文化財センター。

北海道立埋蔵文化財センター 2020『重要遺跡確認調査報告書 第15集』北海道立埋蔵文化財センター。

北海道立埋蔵文化財センター 2021『重要遺跡確認調査報告書 第16集』北海道立埋蔵文化財センター。

御堂島正 1986「黒曜石製石器の使用痕―ポリッシュに関する実験的研究―」『神奈川考古』22:51-77。

御堂島正 2005『石器使用痕の研究』同成社。

湧別町教育委員会 2019『北海道指定史跡シブノツナイ竪穴建物跡発掘調査報告1』湧別町教育委員会。

湧別町教育委員会 2020『北海道指定史跡シブノツナイ竪穴建物跡発掘調査概要報告書(2019年度)』湧別町教育委員会。

湧別町教育委員会 2021『北海道指定史跡シブノツナイ竪穴建物跡発掘調査概要報告書(2020年度)』湧別町教育委員会。

湧別町教育委員会 2022『北海道指定史跡シブノツナイ竪穴建物跡発掘調査概要報告書(2021年度)』湧別町教育委員会。

湧別町教育委員会 2023『北海道指定史跡シブノツナイ竪穴建物跡発掘調査概要報告書(2022年度)』湧別町教育委員会。

吉崎昌一 1995「湧別町川西遺跡出土の植物種子」青柳文吉編『湧別町川西遺跡―北海道東部におけるオホーツク文化の遺跡調査―』:69-75, 北海道立北方民族博物館。

米村喜男衛 1981 「北海道紋別郡湧別町川西遺跡」
『北方郷土・民族誌 1』北海道出版企画センター
(1961 「網走郷土博物館シリーズ 1 川西遺跡調
査報告』を再録)。

Keeley, L. H. 1977 The Functions of paleolithic flint
tools. *Scientific American* 237(5): 108-126.

Keeley, L. H. 1980 *Experimental Determination of Stone
Tool Uses: A Microwear Analysis*. University of Chi-
cago Press: Chicago.

表2 出土遺物一覧(2025年調査)

No.	位置、遺構	層位	器種	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	材質	備考	図番号
17	28号竪穴建物	表土	碟	150.1	103.7	85.5	1348.0	安山岩		
18	28号竪穴建物	表土	碟	142.6	99.2	67.1	1100.0	凝灰岩		
19	28号竪穴建物	表土	碟	(109.2)	(106.1)	(69.0)	(761.0)	泥岩		
20	28号竪穴建物	表土	碟	116.8	91.9	73.1	789.0	安山岩		
21	28号竪穴建物	表土	碟	136.0	69.3	49.1	393.0	安山岩		
22	28号竪穴建物	表土	碟	95.6	(68.9)	(39.4)	(332.0)	安山岩		
23	28号竪穴建物	表土	碟	(93.8)	78.0	(44.2)	(340.0)	安山岩		
24	28号竪穴建物	表土	碟	129.8	57.9	23.2	237.0	チャート		
25	28号竪穴建物	表土	碟	(74.8)	(42.2)	(35.3)	(105.9)	安山岩		
26	28号竪穴建物	表土	碟	(66.6)	(46.0)	23.2	(102.9)	チャート		
27	28号竪穴建物	表土	碟	1006.0	35.9	30.3	156.0	チャート		
28	28号竪穴建物	表土	碟	79.6	42.5	25.5	93.8	泥岩		
29	28号竪穴建物	表土	剥片	35.2	29.7	13.7	5.7	黒曜石	自然面	
30	28号竪穴建物	表土	剥片	(37.2)	(28.8)	(17.5)	(13.5)	黒曜石	自然面	
31	28号竪穴建物	表土	剥片	32.9	18.4	7.7	1.7	黒曜石	自然面	
32	28号竪穴建物	表土	剥片	(13.8)	(10.5)	4.4	(0.1)	黒曜石		
33	28号竪穴建物	表土	剥片	10.8	8.8	4.3	0.1	黒曜石		
34	28号竪穴建物	表土	剥片	9.3	11.5	4.3	0.2	黒曜石		
35	28号竪穴建物	表土	剥片	10.8	17.3	4.8	0.1	黒曜石		
36	28号竪穴建物	表土	剥片	17.9	(22.2)	4.4	(0.4)	黒曜石	自然面	
37	28号竪穴建物	表土	剥片	8.8	13.5	4.7	0.1	黒曜石		
38	28号竪穴建物	表土	剥片	(15.8)	(8.0)	4.9	(0.1)	黒曜石		
39	28号竪穴建物	表土	剥片	(26.9)	(15.2)	6.6	(1.2)	黒曜石		
40	28号竪穴建物	表土	楔形石器	(20.4)	(21.1)	11.0	(2.2)	黒曜石	自然面	
41	28号竪穴建物	表土	楔形石器	(21.2)	(23.1)	9.3	(3.4)	黒曜石	自然面、被熱	
42	28号竪穴建物	表土	剥片	32.7	12.6	5.6	0.6	黒曜石		
43	28号竪穴建物	表土	剥片	33.3	21.9	11.0	4.5	黒曜石	自然面	
44	28号竪穴建物	表土	剥片	(27.3)	13.3	9.7	(1.5)	黒曜石		
45	28号竪穴建物	表土	剥片	27.0	33.7	8.4	3.6	黒曜石	自然面	
46	28号竪穴建物	表土	剥片	(44.7)	(29.6)	(17.1)	11.3	黒曜石	自然面	
47	28号竪穴建物	表土	剥片	(27.0)	(15.9)	8.2	(1.3)	黒曜石	自然面	
48	28号竪穴建物	表土	剥片	24.9	28.9	10.5	3.8	黒曜石	自然面	
49	28号竪穴建物	表土	剥片	(37.8)	23.1	14.2	(9.6)	黒曜石	自然面、被熱	
50	28号竪穴建物	表土	楔形石器	(22.6)	13.5	12.2	(1.9)	黒曜石	自然面	
51	28号竪穴建物	表土	二次加工ある剥片	(16.3)	(14.6)	5.7	(0.4)	黒曜石		
52	28号竪穴建物	表土	甕	(18.4)	(26.9)	7.0	(1.6)	粘土	内面付着炭化物	
53	28号竪穴建物	表土	甕	(24.9)	(53.9)	10.4	(8.4)	粘土	外面摩滅	
54	28号竪穴建物	表土	甕	(21.5)	(35.5)	9.9	(5.1)	粘土		
55	28号竪穴建物 W区サブトレンチ	2	碟	116.6	58.2	40.1	252.0	泥岩		図8.1
56	28号竪穴建物 W区サブトレンチ	2	碟	109.7	62.4	29.1	243.0	泥岩		図8.2
57	28号竪穴建物 W区サブトレンチ	4	碟	49.5	40.3	25.1	48.0	安山岩		
58	28号竪穴建物 W区サブトレンチ	2	剥片	11.6	13.5	4.6	0.1	黒曜石		
59	28号竪穴建物 S区サブトレンチ	2	石鏃	(35.0)	17.0	6.7	(1.6)	黒曜石		図7.7
60	28号竪穴建物 S区サブトレンチ	2	剥片	25.8	43.1	9.5	5.3	黒曜石	自然面	
61	28号竪穴建物 W区サブトレンチ	4	深鉢	(34.4)	(64.9)	9.7	(16.7)	粘土	縄文土器胴部？、外面摩滅	図7.3
62	28号竪穴建物 W区サブトレンチ	4	甕	(38.1)	(31.6)	10.9	(11.6)	粘土	縄文土器胴部？、外面摩滅、内面付着炭化物	
63	28号竪穴建物 W区サブトレンチ	4	楔形石器	(48.1)	45.8	13.0	(21.3)	黒曜石	自然面	
64	28号竪穴建物 W区サブトレンチ	4	甕	(24.4)	(27.1)	8.7	(3.4)	粘土	縄文土器口縁部、内面付着炭化物	図7.5
65	28号竪穴建物 W区サブサブトレンチ	4	甕	(23.3)	(24.4)	9.1	(3.6)	粘土	縄文胴部、外面摩滅	
66	28号竪穴建物	表土	掻器	34.8	33.9	9.3	6.9	黒曜石		図7.6
67	28号竪穴建物	表土	土器	(44.2)	(56.2)	8.5	(16.3)	粘土	縄文土器口縁部、内面付着炭化物	図7.1
68	28号竪穴建物	表土	甕	(27.9)	(31.7)	8.1	(4.6)	粘土	縄文土器口縁部、内面付着炭化物	図7.4
69	28号竪穴建物	表土	甕	(58.4)	(48.2)	15.2	(28.0)	粘土	オホーツク土器貼付文口縁部、内面付着炭化物	図7.2



写真1 遺跡遠景（2025年8月撮影）



写真2 遺跡全景



写真3 調査状況



写真4 A-Bセクション



写真5 C-Dセクション



写真6 出土遺物（縮尺不同）

ふりがな	ほっかいどうゆうべつちょう　かわにしおほ一つくいせきはつくつちょうさがいほう　にせんにじゅうごねん										
書名	北海道湧別町川西オホーツク遺跡発掘調査概報（2025 年）										
副書名											
巻次											
シリーズ名											
シリーズ番号											
著者名	高瀬克範										
編集者名	高瀬克範										
編集機関	北海道大学大学院文学研究院考古学研究室										
所在地	〒060-0810　札幌市北区北10条西7丁目										
発行年月日	2026（令和8）年1月8日										
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因			
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号								
川西オホーツク	北海道紋別郡湧別町川西516	15598	I-21-032						44 度	143 度	12/08/2025
									14 分	34 分	～
				09 秒	33 秒	19/08/2025					
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項					
川西オホーツク	集落址	オホーツク文化	竪穴建物跡	土器							
		～		石器							
		擦文文化									
要約	第28号竪穴建物の発掘調査を実施した。表土除去と遺構内部のサブトレンチの掘削途中で調査を終了した。表土および遺構埋土から擦文文化、オホーツク文化、続縄文文化の土器片や、黒曜石製石器、礫などが出土した。時間の制約から遺構の壁や周堤の詳細を把握することができなかったため、次年以降の調査で確認する予定である。										